

局的政策を選ぶことは意思決定に関する意思決定に関する意思決定である。このようにして意思決定の水準を高めてゆく。

(9) おわりに

以上、意思決定過程が高水準化し、最適化・適応・学習という概念が導入され、さらに多変数多目的制御・安定性・自己組織系と拡大されてくる時、情報の概念がますます大きな比重となってくる。

動的計画法は1970年代前後のコンピュータとともに発達し、または時代を先取りした理論であった。高水準の意思決定過程の理論はこれまでの動的計画法を含み、しかもこれから出現する高性能のコンピュータに相応する理論でなければならな

い。

最後に、人間精神の創造性はコンピュータにより強化されこそするが、人間精神は中心的地位を占めることは明らかで、機械化されるものではないことを強調して筆をおくことにする。

参 考 文 献

- 1) R. Bellman; Dynamic Programming, *Science*, Vol.153, No.3731 (1966)
- 2) R. Bellman; An Introduction to Artificial Intelligence, Boyd & Fraser Pub. Company (1978), 小田中敏男他訳, 「人工知能入門」, 日刊工業新聞社 (1982)

書 評

竹内啓編

計量経済学の新展開

東京大学出版会 278頁 2800円

“Econometrics”が独自の分野として確立されてからすでに半世紀が過ぎ、さらに経済学もかなりのピッチで自然科学に接近しつつあることは周知の事実であろう。

本書は計量経済学の、主として統計的方法の展開について、10人の著名なエコノメトリシャンが各々の研究成果をまとめている。したがって各章は独立した構成をとりつつも、全体としては「同時方程式モデル」と「時系列モデル」の手法の進展について種々の角度からとりあげている。ここで両者の方法上のちがいはケインジアン対マネタリストの *philosophy* の相違を背景としているのだが、応用面では、同時方程式モデルの大型化・複雑化が進む一方、時系列モデルは計測上の予測力のみを重視しつつある。このように、ともすれば“理論なき計測”に陥りがちな傾向を警告して、本書は理論計量経済学の立場からの方法改善を論証するのである。なお各章末の参考文献は豊富であり、最終章の佐和教授のモデルの有効性をめぐる議論は示唆に富んでいる。

ところで、数理科学の精密化が進むと、それまで潜在化していた未開拓な問題を解決するための新たな理論が現われるであろう。数理統計学における AIC のベイジ

アンへの拡張や統計モデルの幾何学的解明など、めざましい進歩をとげていることを鑑ると、経済学もまた、より包括的な領域へと位相的に解消されていくかもしれないのである。

以上の意味で、本書は多くの課題への方向性をはらむ内容をもち、数理科学にかかわる方々にも参考となるであろう。

なお、本書の構成は以下のとおりである。

序章「計量経済学の最近の展開」竹内啓, ①「推定の漸近理論の発展とその計量経済モデル推定への応用」同 ②「同時方程式推定量の小標本特性」森棟公夫, ③「時系列モデルによる経済分析」浪花貞夫, ④「合理的期待形成仮説とマクロ計量分析」浅子和美, ⑤「経済分析とスペクトル解析」新居玄武, ⑥「ベイジの手法による統計分析——部分的なサーベイと今後の展望」美添泰人, ⑦「非正規性のもとでの統計解析」加納悟, ⑧「シユアモデルにおける推定と検定——トランスログ型モデルへの応用」和合肇, ⑨「産業連関表の利用と問題」柳沼寿 ⑩「マクロ計量モデルの有効性をめぐって」佐和隆光 (東京都労働経済局 木下望)